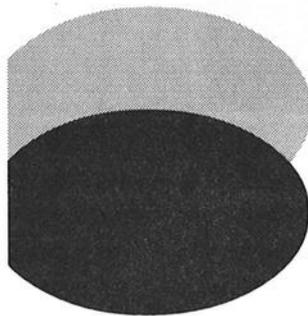


2001831

絵本学会 NEWS No.13

発行：絵本学会
発行日：2001年8月31日
編集：絵本学会事務局・広報委員会
事務局：〒187-8505 東京都小平市小川町1-736
武蔵野美術大学芸術文化学科今井研究室内
FAX：042-342-5191
<http://ehongaku.musabi.ac.jp>



『第4回絵本学会大会』報告
福音館論文募集 etc.のお知らせ
インフォメーション-絵本関係展覧会・イベント
事務局からのお知らせ

絵本学会

第4回 絵本学会大会を終えて

第4回絵本学会大会 大会実行委員：藤本 朝巳

2001年5月4日(金)～5日(土)、横浜市泉区緑園都市にあるフェリス女学院大学、緑園校舎を会場として、第4回、絵本学会大会が「絵本とおとな・絵本と子ども」というテーマで開催されました。今回は例年より一カ月早い時期に行いましたので、慌ただしい準備に追われた大会でしたが、盛況のうちに無事終わることができまして、関係の方々、またお手伝い下さった方々には心より感謝申し上げます。

大会初日は、350名収容のグリーンホールにて、学会会長、三宅興子先生の開会宣言、フェリス女学院大学、佐竹明学長の挨拶にはじまり、プログラムは順調に進みました。基調講演は、鎌倉在住の絵本作家、西巻茅子さんに、「絵本とおとな・絵本と子ども」と題して講演していただきました(内容については、講演内容をご覧ください)。西巻さんは、講演の後、一般の方々へのサイン会のために2時間以上もお待ちいただき、ありがとうございました。

続いてシンポジウムでは、児童文学研究者、赤木かみ子さん、絵本作家の飯野和好さん、ほるぶ出版社の松井英夫さんに、それぞれ違っ

た立場から「世代を越える絵本-絵本のヤングアダルト現象-」と題して話し合っていました。学会運営委員の佐々木宏子さんの司会のもと、さまざまな意見も出て、楽しいひとときとなりました。

夕方より、2001年度総会が行われ、次次第通り、事業報告、会計(決算、予算)、事業計画、その他を審議し、承認いたしました。その後、大学食堂にて、大勢の参加のもと、交流会を行いました。関係者、参加者よりの楽しい挨拶などもあり、楽しく親しく終わることができました。なお、地方からの参加者は、大学近辺の藤沢市湘南台のホテルに一泊し、遅くまで交流会もおこなわれたようです。

大会2日目は、9時より、二会場に別れて研究発表が行われました。A室(キダーホール緑園)は運営委員の香曾我部秀幸さんの司会のもと、村川京子さんの「近代日本の0・1・2歳児の絵本の変遷」、米谷茂則さんの「戦後の小学校低学年児童は、どのような絵本を読みついできたのか」、鳥越信さんの「戦後初期の絵本(1945～60年)」、柴村紀代さんの「『こどものせかい』について」、大橋真由美さんの「金井信生堂刊行絵本『コドモノチカヒ』に見る「陰影」の表現」の発表が発表されました。

B室(8106 グリーンホール)は会員の西村醇子さんの司会のも



初日・二日目とも、大勢の参加者が講演や研究発表に参加。



受付付近では、絵本や絵本に関する書籍の販売が行われた。



研究発表プログラムA室



研究発表プログラムA室

と、瀧川光治さんの「くいたずらはかせのかぐの本」における「言葉と絵」-子ども自身が考えるきっかけとしての「言葉と絵」のつながりの分析-、窪田美鈴さんの「桃太郎絵本の視覚表現の変遷～江戸期から明治期における門突破図を中心に～」、鈴木穂波さんの「食」から見た絵本考」、中川素子さんの「表現としての見返し」、そして運営委員の藤本朝巳と院生雨宮明子さん、富田景子さん、遠藤美緒さんの「英国古典絵本の研究-ランドルフ・コールデコットとケイト・グリーンウェイの魅力-」が発表されました。

研究発表に関しましては、お詫びしなければなりません。今回は例年より開催時期が早かったため、当初、研究発表希望者が少なく、心配しましたが、大会間近になって希望者の申し出がありました。その関係で、事前の郵送物に研究発表のレジメを入れる時間の余裕がなく、大会時にはじめてレジメをお渡しすることになりました。大会の中心である研究発表の方々のお名前と内容を事前に知らせて欲しかったとの要望もあり、ここにお詫びして、今後注意したいと思います。また会員の方々も、研究発表の申し込み締め切りの日時を早めに確認の上、出来るかぎり、早くお申し込みいただけますよう、お願い申し上げます。また研究発表は近年、さまざまな機材（ビデオ、OHP、ビジュアル・プロジェクター、スライドなど）を使う方が増えていますが、会場によっては全ての機材を用意することができない場合がありますので、学会としては、使用機材は一発表につき一つということをお願いしてあります。今後も、ご協力よろしくお願ひいたします。

研究発表の後、参加して下さった絵本作家の方々によるサイン会が楽しく催されました。飛び入りでサイン会に参加して下さった作家の先生方もあり、ここにお礼申し上げます。

午後からは、英国ケンブリッジ大学ホマトン校前教授ビクター・ワ

トソン氏の講演が「英国の絵本研究者と絵本研究方法」と題して行われました。通訳は翻訳家の田中美保子氏にお願いしました。事前に、日本での絵本講読事情や研究の状況を少し説明してありましたが、来日はじめてのワトソン氏は、話にくい講演題を与えられて内容には苦慮なさったようです。また英国で人気のある作家と日本でよく読まれている作家にも微妙にずれがあるので、その点でも講演に用いる画家の選定も難しかったようです。しかし、ワトソン氏は数名の作家の作品を具体的に用いながら、楽しくお話し下さいました。なお、講演後、電話や手紙で、「内容が古い」「すでに知られたことだった」との意見もありましたが、「子どもの本をこのように読み説くことができるのか、すばらしかった」「いい企画だった」との感動のお便りもありました（内容は講演記録をご参照下さい）。

プログラムの最後は、三会場に別れて、ラウンド・テーブルでの話し合いが行われました。R1-絵本作家研究：赤羽末吉-では、話題提供者に赤羽末吉のご子息、赤羽研三さん、安曇野ちひろ美術館の学芸員、上島史子さんをお迎えし、コーディネータは藤本朝巳が務めました。R2-絵本表現研究：“もの”としての絵本-では、話題提供者にグラフィックデザイナーの杉浦範茂さん、運営委員の安曇野ちひろ美術館、松本猛さんをお迎えし、コーディネータは運営委員の今井良朗さんが務めました。R3-絵本読者研究：赤ちゃん絵本ブックスタート-では、「子ども読書年」推進会議の推進委員の佐藤いすみさん、運営委員の鳴門教育大学、佐々木宏子さんをお迎えし、コーディネータは、運営委員の世田谷文学館、生田美秋さんが務めました。いずれの会場も盛況で、楽しい話し合いが行われました（内容は報告文をご覧ください）。なお、今大会は、大会に合わせて、子ども向けのプログラムも実施されました。ワークショップ、-お化け-セッション-は、4月



研究発表プログラムB室



研究発表プログラムB室



研究発表プログラムB室

14日(土)の準備会と5月5日(土)の二日間にわたって行われ、近所、湘南地域の子どもたち20名ほどとその保護者、また、笠尾敦司さんの指導のもと、東京工芸大学の学生約20名、運営委員の石井光恵さんの指導のもと、日本女子大学の大量の学生の協力を得て、たいへん楽しい催しになりました。後日、出来上がった絵本作品を受け取った子どもたちからの嬉しい頼りもたくさん届いています。

また今回は、学会はじめての手作り絵本の展示、発表会も行われ、たくさんの方の作品が展示されました。この催しのため、運営委員の笹本純さんが、企画、連絡、準備、展示、片付まで担当して下さいました。この企画も毎回行われることを期待しています。

なお最後にお願ひですが、今回、参加申し込みの葉書が大会前日に届いた方があり、またその葉書での弁当や懇親会の申し込みもありました。急ぎ追加の注文などいたしましたが、連絡をきちんといただけるのはありがたいことですが、もう少し早めに投函下さいますように、お願いいたします。また食事、弁当の申し込みがあったにもかかわらず、届け出なしのキャンセルが多く、大会委員会にて処理いたしました。今後とも連絡その他、ご協力お願い申し上げます。

なお、大会前には、フェリス学院大学の生涯学習課職員の方々には忙しいなか、全国の会員はじめ関心のある方々との連絡その他、たいへんお世話になりました。また前日は、案内図の張り出し、横断幕、動線、案内板の設置にいたるまでご協力いただき、一つの大会の開催に伴う、裏方の仕事のたいへんさを深く感じました。

また地域の文庫活動などをなさっている方々約25名、また大学の院生、関係大学の学生のスタッフとしての、またボランティアとしての活動にも感謝します。受付から各催しの準備、案内、後片付けにい



研究発表プログラムB室



英国の絵本研究者と絵本研究方法 ピクター・ワトソン氏

たるまで、すべてこれらの方々の方によってなされました。さらに、今回の大会のために、大学近辺にある横浜とも社さんは、開催期間中、絵本などの即売会をして下さり、雄松堂書店さんは、英国の貴重図書の展示販売をして下さいました。また大学図書館からは展示コーナーを設置し、本学所有の英国貴重図書の展示をいたしました。関係各位に、ここに紙面を借りて深くお礼申し上げます。



作品発表展示室

絵本学会 2001 年度総会報告

絵本学会 2001 年度総会は、2001 年 5 月 4 日フェリス女学院大学（神奈川県横浜市）で開催されました。規約の一部改正、2000 年度活動報告ならびに 2001 年度活動計画が報告された後、以下の総会次第にしたがって審議が行われました。

総会の出席者数：48 名、委任状提出者数：82 名

絵本学会第 4 回定期総会次第

1. 開会の辞

2. 会長挨拶

3. 規約の一部改正について

規約第 11 条（会費）の一部改正について事務局より提案があり、改正案通り承認された。

《現行》

第 11 条（会費）

会員の会費は、年額、正会員 8,000 円、準会員 4,000 円、賛助会員一口 20,000 円を一口以上とする。賛助会員以外の会員は、入会金 2,000 円を要する。

第 12 条（会員資格の取消）

会費未納が 3 年以上の会員は、理事会の議を経て除名することができる。

《改正案》

第 11 条（会費）

会員の会費は、年額、正会員 8,000 円、準会員 4,000 円、賛助会員一口 20,000 円を一口以上とする。賛助会員以外の会員は、入会金 2,000 円を要する。

ただし、入会がその年度の 10 月 1 日以降の場合会費をそれぞれ 2 分の 1 とする。

第 12 条（会員資格の取消）

会費未納が 2 年以上の者は、会員の資格を停止し、総会での議決権、運営委員選挙権、被選挙権を持たない。なお、未納の会費が納入された場合、その時点から権利は回復されるものとする。
会費未納が 3 年以上の会員は除籍することができる。

4. 2000 年度活動報告

2000 年度活動報告

●第 3 回絵本学会大会

6 月 10 日、6 月 11 日、佐賀県伊万里市民図書館

テーマ：「絵本のミレニアム」～絵本の表現の可能性はどのように発達していくのか～

●理事会・運営委員会

4 月 1 日 運営委員会

5 月 13 日 運営委員会

6 月 10 日 運営委員会

7 月 15 日 運営委員会

9 月 30 日 理事会・運営委員会

10 月 28 日 運営委員会

11 月 27 日 運営委員会

12 月 9 日 運営委員会

1 月 28 日 運営委員会

3 月 3 日 運営委員会

●広報

広報紙『絵本学会ニュース』の発行 5 月、8 月、12 月

●企画

2000 絵本フォーラム in やまがたの開催 5 月

絵本フォーラム 2000 「こども、絵本、いのち」の開催 8 月

マンガ、絵本、アニメーション三学会合同シンポジウムの開催 11 月

●出版

絵本学会研究紀要『絵本学』第 3 号の刊行

機関誌プレ創刊号『ブックエンド』の発行

5. 2000 年度会計・会計監査報告

事務局（今井）より 2000 年度決算について説明。増成隆士監事より監査結果を報告、原案どおり承認。

6. 2001 年度活動計画に関する件

2001 年度活動計画

●第 4 回絵本学会大会

5 月 4 日、5 月 5 日、フェリス女学院大学（神奈川県横浜市）

テーマ：絵本とおとな・絵本とこども

●広報

広報紙『絵本学会ニュース』の発行 4 月、8 月、12 月

●企画

「絵本フォーラム 2001」の開催

「絵本制作セミナー」の開催

●研究

絵本学会例会の開催

●出版

絵本学会研究紀要『絵本学』第 4 号の刊行

機関誌『ブックエンド』の発行

●分科会活動

地域活動、分科会活動の推進

●その他

会員名簿の発行

7. 2001 年度予算案に関する件

事務局（今井）より 2001 年度予算について説明。原案どおり承認。

8. その他質疑応答

9. 閉会の辞

2000年度 決算書

[収入]

項目	予算額	決算額
会費収入	3,196,000	3,068,000
法人等会費	280,000	200,000
個人会費	2,916,000	2,868,000
利息収入	5,000	332
参加費収入	280,000	472,000
大会参加費	200,000	408,000
フォーラム参加費	80,000	64,000
積立組み入れ	2,200,000	2,200,000
その他収入	100,000	669,180
前年度繰越金	1,170,000	1,170,000
合計	6,951,000	7,579,512

[支出]

項目	予算額	決算額
運営費支出	350,000	744,500
総会・大会費	200,000	594,500
大会運営補助費	150,000	150,000
活動費支出	200,000	119,992
専門委員会活動費	200,000	119,992
旅費・交通費	700,000	496,430
謝金支出	200,000	270,000
講師謝礼	100,000	120,000
論文集編集・制作費	100,000	150,000
機関誌刊行費	2,800,000	3,121,441
印刷費	1,800,000	1,748,303
編集制作費	800,000	1,273,138
発送費	200,000	0
印刷費支出	1,000,000	769,650
絵本学会ニュース	360,000	381,150
研究紀要	280,000	388,500
その他	360,000	0
消耗品費支出	80,000	17,098
通信費支出	700,000	432,780
絵本学会ニュース発送費	270,000	-
研究論文集発送費	120,000	-
事務連絡費	310,000	-
報酬支出	450,000	410,000
事務局報酬	450,000	410,000
会議費	30,000	0
雑費	50,000	43,115
予備費	100,000	0
機関誌刊行積立金	200,000	500,000
次年度繰越金	9,100	754,506
合計	6,951,000	7,579,512

2001年度 予算書

[収入]

項目	予算額
会費収入	3,136,000
法人等会費	280,000
個人会費	2,856,000
利息収入	500
貯金利息	500
参加費収入	280,000
大会参加費	200,000
フォーラム等参加費	80,000
積立金組み入れ	1,000,000
その他収入(入会金等)	100,000
前年度繰越金	254,506
合計	4,771,006

[支出]

項目	予算額
運営費支出	350,000
総会・大会費	200,000
大会運営補助費	150,000
活動費支出	200,000
専門委員会活動費	150,000
その他活動費	50,000
旅費・交通費	600,000
謝金支出	200,000
講師謝礼	100,000
論文集編集・制作費	100,000
機関誌刊行費支出	1,000,000
印刷費支出	800,000
絵本学会ニュース	350,000
研究紀要	300,000
その他	150,000
消耗品費支出	80,000
通信費支出	700,000
報酬支出	420,000
事務局報酬	420,000
会議費	30,000
雑費	50,000
予備費	100,000
機関誌刊行積立金	200,000
次年度繰越金	41,006
合計	4,771,006

資産残高明細 2001年3月31日現在
 現金 42,024円
 三和銀行国分寺支店 436,842円
 たかの台駅前郵便局 775,640円
 内積立金 500,000円

2001年4月17日 会計 武蔵野美術大学 今井良朗
 上記の通り報告致します。(事務局) 武蔵野美術大学 小林由佳子
 2001年5月4日 監査 筑波大学 増成 隆士
 公認会計士 千田 篤

基調講演

絵本とおとな、絵本と子ども

講師：西巻茅子

みなさん、こんにちは！（会場：こんにちは！）ただいまご紹介していただきました、西巻茅子と申します。

私も講演会は結構これまでやってきたんですけど、学会というところで講演をするのは初めてです。私は結構学問というものを尊敬しておりまして、ああ絵本の絵本学というものができるんだなということ、もう大変喜ばしいことだと思っていて、すごく期待をしております。今日は「絵本とおとな 絵本と子ども」という題をいただいたんですけど、私は仕事としては子どもに絵本を描いてきましたので、そういう経緯を含めて、常々私が考えていることを、学問的とは言えませんが、絵本について思うこと、いろいろお話ししたいなと思っております。よろしく願います。

まず、少し自己紹介を兼ねまして、32、3年絵本を描いておりましたので、いろんな経緯をざっとお話ししたいと思います。私は、1967年28歳の時に初めて『ボタンのくに』という絵本を描きました。それはこぐま社という出版社からで、こぐま社もまだ出来て2年目の出版社でした。当時、1960年代の終わりの頃、日本では子どもの絵本が出版し始めてきた時代だったと思うんですね。「こどものとも」や「こどものせかい」や、それから「岩波こどもの本」が、少しずつ出てきたところで、私も絵本というものがどんなふうこれから先子どもの世界に浸透していくのか全く分からないまま、この世界に入りました。当時、日本社会は、成長へ向けて、これから明るい未来があるという、貧しかったけれど、心はひろびろとした時代だったと思うんですね。日本の子どもたちに、日本の作家のオリジナルの絵本を作っていくという気運という出版社が次々と現れて、子どもの本が、子どもの未来のためにという明るい希望のようなもので、絵本が出版されていったんだと思います。

そこへちょうど私が美術大学を出まして、デザイン科を出たんですけど、デザインの仕事はなにか私の性に合わないというか、それで絵を描く仕事をしていきたいと思います。私は、タブロー絵描きの家で育ったものですから、絵を描くということはほんとに子どもの時から好きで、日常のように描いておりましたけれども、絵描きが貧乏だということもすごくよく知ってまして、タブロー絵描きは嫌だなと思っていたんですね。絵を描くということで何か社会と関わりを持ちたい、社会と関わりをもてば、そこに何か得られるんじゃないかと思っておりました。当時戦前からずっと日本のタブロー絵描きというのは、みんな社会との関わりよりも、自分との関わりとか、そういう近代人のいろんな問題を抱えながら、暗い絵を描いてた（笑）絵描きさんが多かったと思うんですけど、あれはいやだなと思っておりました。そんなわけで、私は絵を描く仕事はしたいとは思っていたんですね。だけでも絵本ということは、その頃ちょうど本屋さんに田島征三さんの『ふるやのもり』だとか、長新太さんの絵本が現れてきて、早速それを買って求めて、あっという間に絵を描いていいならこの世界でも仕事したいわ、ってそういう感じだったんですね。

一方で生活のためにアルバイトをいろいろしてたんですけども、「子どものアトリエ」というものを主宰しておりました。それは本当にアルバイトのためにお月謝をいただいて、近所の幼稚園を借りてやっておりましてなんですが、そこにやってきた子どもたちっていうのが、私のそれ以後を決定したのではないかと思っています。子どもたちはほんとに素晴らしい絵を描いてくれたんですね。私の仕事としては紙を用意して、絵具を用意して、そしてただ自由な雰囲気を作って、好きなように描いてっていうようなそういう働きかけだけで、3歳から10歳くらいまでの子ども15、6人でしたけれども、毎週素晴らしい絵を描いてくれました。私は子どもの時から絵描きの家に育って、ずっと絵を描いてきたわけですから、ある種特殊な人間だと思っていたんですね。それで絵を描くのが好きで、楽で、一番いいわと思っていたんですが、そこに来て子どもたちは別に特別な子どもでもなんでもない、まあ絵が好きだからということが多いんですけども、お行儀が悪いから少し落ち着かせるためにだとか、お母さんたちはいろんな思惑で通わせるわけですよね。そこで出会った子どもたちっていうのは、ほんとにほっとくとどどど絵を描くわけですね。何枚でも、一日5枚くらい描く子もいるし、一枚の絵をじっくり描く子もいるし、あまり長時間かけない、さっさと描く子もいれば、小さな細かい線でいつまでも描く子とか、絵具を画用紙の上にとろとろと混ぜながら、えもいわれぬ美しい色彩を生み出して、そしてそれを小学校に上がる前後の子どもが一時間くらいかけて画用紙の上を絵具を動かしてびたっと筆をとめて、できたという顔をしてにっこり笑う、そういう姿を見ていると、ほんとうに絵を描くというのは人間に与えられた本能っていうとちょっとあれだけれども、表現の一つの手段として誰にでも与えられた表現方法であると私は思いました。だってまだ何も教えてもらっていない2歳の子どもでも鉛筆を持てるようになったらみんな絵を描くわけですね。それが、小さい子ほどその子どもの表現をするわけね。内側から溢れてきたもので絵を描くっていう。私たちは芸大なんかに行っていますと、絵を描くことはみんな得意だと半分思ってたんですけど、少しまんない気になって、そしてあと半分辛いという気持ちを抱えながら、自己を表現するということは一体どういうことなのかを、ああでもないこうでもないって頭を悩ませて、つまらない絵をいっぱい描いてるっていう人たちを、そういう言い方したら悪いんですけども（笑）、立派な絵もたくさんあるんですけど、私たち、20代の若い人間にとって、いい絵なんてめったにないわという気持ちを私は持っていました。幼い頃から絵を見るという習慣がついてますから、絵の中にある本物を私なんかは求めて、様々な展覧会を歩いたりしてたんですけども、めったに出会えないいい絵っていうのは、なんでいいのかわからない。でも、ああっ、いい！っていうのに出会うことがあるわけですね。ところが、子どもが描く絵っていうのはまんないわけね。何かわからない、あっ！いいな！っていうエッセンスを持っている。それは絵を描く姿にも表れているように思いました。ここにその創造というか、人間の、言ってみれば、表現。私たちはいろんな表現をもっていますが、絵画表現の原点はここだっていうふうに感じたんですね。まあそれもまだ若い頃ですから、感じつつも、うーん、参った！っていう感じで、それがいったい人間としての生きていく姿の中のどのところなのかはあまりよく分からないままそのうちに、私は絵本を描くチャンスに恵まれたわけですね。さっき言った『ボタ

ンのくに』っていう本を描くことになるんですけども、その時に、やっぱりはっきり思っておりました。あの子たちみたいに、心から楽しんで、私も内側から好きなものを好きなように描こうっていうふうに。そうするとあの子たちの表現に近づけるんじゃないか、人間の表現の基本に近づけるんじゃないかというふうに思って、『ボタンのくに』を描いたことを覚えています。ただ、そういうふうに出て出来上がった本は本当になんだかわけのわかんない、しっちゃかめっちゃかな本で、今見ても恥かしいような本なんですけれども、不思議なことに、最初に描いた本も、今までずっと子どもたちに好かれて版を重ねております。それからまた不思議なことに、絵本作家の友達の中でも、西巻さんの絵本の中でいいのは、『ボタンのくに』だっていう人がたくさんいます。それで本当に私として恥かしいところがたくさんある本なんですけれども、あの子どもたちに負けないように、とりあえず元氣よく楽しんで描こうとしたことが、本の中に定着しているんじゃないかなと、30年以上前の本を振返って思うんです。ま、そんなことで、私は人間の表現の原点というものを常に忘れないで絵本を描こうって思っております。

そして、もう一つ、子どものアトリエにいた子どもたちっていうのは、3歳から10歳くらいの子供たちはみんないい絵を描いていたんですよ。あの子どもたちは、あんな素晴らしい絵を描く人間なんだから、絵の良さというもの、絵画表現の本質というものを、やっぱり本質的にわかっているのではないかと私は思いました。それで、私は、あの子たちにむけて、表現の原点の仕事をしていこうと思ったわけね。だけどそれは相当心配でした。子どもたちが本をどんなふうに見るかも何も知らない。私は子どもの頃本を見たこと全然ないんですよ、戦後すぐに小学校に入った子どもで、ほとんど絵本を楽しんだ経験がないんですね。絵は随分見てきましたけれど、絵本というのはあんまり見たことがない。私が作ったものを子どもが楽しんでくれるかどうか、相当に心配でした。ところが幸いなことに、そのあと『まこちゃんのたんじょうび』っていうのを次の年に描きまして、その次の年に『わたしのワンピース』っていう本を描きました。それ一冊一冊描くにあたっては、私は絵本っていうものを随分勉強して、本っていうのは一冊の表現っていうことを学んできたんですけども、それも幸いなことにずっと版を重ねて、『わたしのワンピース』は100版以上重ねて、今でも子どもたちにすごく好かれています。

そういうふうにして私は、絵本というものを30何年描いてきたんですけども、おとなって言うのは、なかなかそうそう原点、最初に思った深い気持ちを常に持ち続けるってことは難しいし、欲とか見得とか競争意識とかお金の問題とかいろんなことでごたごた考える中で仕事をしているわけですけども、やっぱり常に考えてきたことは、子ども。子どもっていうのは人間の基本だって思うんですね。だからそれは変わらずに子どもということを私の仕事の受け手としていつも考えています。

今日は、絵本っていうものをどう考えるのかということも題の中に含まれているかなと思って、私もいろいろ考えてきたんですけども、つまりまず絵画表現という、そのアトリエで子どもたちがやったようなことを、私たち人類は長い歲月、絵画表現という表現手段をみんな持ってきたわけですよ。そこで様々な表現があって、けども私は

一番関心があるのが、その中で、ことばっていうのはいろんな民族がいろんなことばで表現をしますよね。ことばのやりとりをしながら人々との関係を築いていく。そういうことばを持つということ、どの民族もみんなやってる。それと同じようにどの民族もみんな絵画表現を持ってきたに違いないと思っています。文字を持たない民族っていうのはたくさんいるし、無文字社会っていうのは、今でもたくさん世界にはありますし、そういう人々はたくさん生きているわけですけども、その無文字社会の人々の絵画表現というものに私はすごく関心があって、それはそういう発想から入ったわけではありませんけれども、学生時代の頃から、広い世界の中から、無文字社会のプリミティブな社会の人たちが作った絵画、民族のいろんな様々な装飾にすごく関心があって、民俗博物館とかに行くのが趣味だったんですね。それである時、民俗博物館に行くと、人間の原点、ものを作る原点というのか、それからどンドンどンドンエスカレートしたりソフィスティケートされて、繊細に華麗にという歴史の展開をしていくわけですけども、その一番底にあるプリミティブなものかなんて好きかなんかと思って、やっぱりでもそこに行くとか心が安らぐとか、いい感じとか。そこには「個」がないのね。ピカソの絵だとかシャガールの絵だとかいった個々の存在っていうのはなくて、例えば、アメリカインディアンの何とかいう部族の作品、それからメキシコの何世紀のなんとかの発掘品とかいうことしかないですよ。それは非常に私たちを気持ちよくさせてくれる、そういう安らぎの場として私は結構民俗博物館に行ってたんですね。ある時ね、幼稚園に呼ばれて、子どもの絵がいっぱい飾ってある面白い幼稚園があるんですよ。自由勝手な気ままな、外で遊んでる子と、絵を描いている子と、部屋の中で本を読んでいる子がごっちゃまぜになっている幼稚園。逗子の〇〇幼稚園なんですけれども、そこに行った時に、あっ、この前見たメキシコの民俗展と同じだという感じを受けたんですね。そこにやっぱり生き生きとしたのびのびとした人間の生命力みたいなものが、ぱーっと溢れていて、あーっと思いました。やっぱり幼い子どもの表現っていうのは、無文字社会の人々の表現に近いとそれから思うようになりました。そんなことで絵画表現っていうのはどんな社会でも、どうも相当古い時代から私たちと共にあって、そういう大きな枠組の中から絵本を考えたり感じたりしていきたいというふうにもいつも思っておるわけですね。

それから、絵画表現についてですが、現実の中で絵っていうものを、私たち現代人は、そして一般人は相当誤解していて、絵が何か現実を平面に写し取ったものだというような考えを持っていらっしゃる方が意外に多いと思うんですよ。だけれども本当は絵画表現というのは、それ自体、ある種の言葉と同じように、構造を持っていて、文法を持っていて、この民族のこの人たちは、このことはこういうことなのよという、ある種の約束事を持ちながら、表現されてきたものなんですよ。ところが近代になってからは、近代っていうとやっぱり、個が屹立してくる時代で、そして「私」の絵、「私」の絵画というものが近代になるとどンドン大きくなってくるわけですね。そして私たちはその中で、ルネッサンスとかギリシャとかの写実っていうことも大きな絵画の歴史の中ではある部分でしかないわけね。そうじゃなくて、みんな心の中にある問題をお互いに分かり合うために、ある種の約束事を決めながら、それは誰が作ったというわけではなく、言葉のようにみんな決めながら作り上げていったもの、それがプリミティブな

社会の絵画だと私は思うんですけども、それがいろんな神話時代だとか、中世を経て、そして中世なんてヨーロッパで考えれば、相当キリスト教というものをお互いに共有していくための装置として絵画が随分使われてきたわけだし、もちろん本がたくさんありましたね。写本というの、その中にたくさん絵がありましたけれど、それは画工さんという人が手描きで描いていくわけですから、誰々の絵とか、誰々作とかそういうことではありません。みんなが共有したそのキリスト教文化の中で、たくさんの人たちの力によって、みんな受け手である、描き手であるというようなもちろん職人、上手な人たちが描いたんでしょうけれども、そういう関係性の中でたくさんのもが生み出されてきているわけですよ。日本でももちろん絵巻物という優れた絵本というか、物語を絵と文字で描く、それから、伝記を絵と文字で描く、仏教の教えを絵と文字で書く、まあ様々な、みなさん御存知だと思いますけれども、『源氏物語絵巻』や『一遍上人絵伝』だとか、たくさん絵画と物語、そういうものをみんなで共有するためにずっと作られてきているわけですよ。そういうふうに私たちは絵画表現を様々な形で、人々との関係性の中で使ってきたんだっていうふうに思っています。それを、なんとなく勘違いしているというか、現代社会では、作者があって、作家がいて、受け手がいて、作者は自分の思いを、自分の思想を、自分の考えを、精神を、相当苦労した中で描いていくという、そういうことっていうのはほんとに私たちの歴史の中ではほんの100年くらいの出来事っていうふうに思うんですね。

「絵本とおとな、絵本と子ども」っていうと、おとなとして絵を楽しむ方法としては、相当数印刷された絵というもので、私は絵の勉強もしたし、楽しむこともしたし、いわゆる『絵でみる中世』とかいう本が平凡社とかいろんなところから出てますよね。そういうものが私はすごく好きで、私は絵本として挙げるならそういうものをたくさん楽しんできたし、それから例えばポッシュの、15、6世紀の中世の絵描きですけども、祭壇画っていう教会の祭壇に掲げる絵なんかを、これはものすごく面白い不思議な絵で、『悦楽の園』っていう祭壇画は原寸はどれくらいかわからない相当大きな絵で、細密な不思議な世界観で描かれた絵なんだけれども、それを細部を切り取ったり、細部と細部を分けたりしながら、すごく面白いイギリスで出てる本をもらったことがあって、飽かずに眺めていられるという本なんですけれども、そういうふうにおとなとして楽しむ絵本というのが数々あります。例えばウィリアムブレイクの展覧会がオルセー美術館であったときに買った厚い画集なんかはやっぱすごく面白い。そういうちょっと古い時代の人間の頭の中を見てみたいという感じでそういう画集を丹念に見たりして、すごく好奇心を出したり楽しみにしたりしておりますけれども、そういうふうにおとなにとっては幅広いジャンルにわたって、写真集も広くいえばそうかもしれないし、それから近代絵画の画集だって、私たちが実験的に作って、こんなのが絵本よ、というように自己表現とか自分の発想でもって作る絵本もたくさんあるかもしれないし、それから、1950年代、というか私が若い頃は、意外に詩人と絵描きが組んで詩画集というのが随分出されたことがあるんですね。この頃あまり見かけなくなりましたが、そういう美しい本に、美しい詩にエッチングなどで作られた美しい画集っていうのがありますよね。そういうふうには私たちは、おとなとしては絵を幅広く楽しむ方法として本という形式を楽しむことができるわけですけども、子どもの本っていうことになると、私はずっと子どもの本

を描いてきたので、自由な発想とかいろいろ言いますけども、相当にそれなりの考え方、子どもに対する考え方、子ども観というものがないといけないうんじゃないか、というふうに30年経っているいろいろ考えさせられてくるんですね。子どもとはいったい何かということを選びかたにして、やっぱり子どもの絵本を考えることは私は出来ないなと思っております。やはりこういう絵本学会っていうところの重要なポイントは、私たちは子どもの本を随分濫造してきたと思うんですね、日本社会がね。戦後、子どもの本、子どもの本、と言って1960年代後半くらいからずっとものすごい膨大な絵本が生み出されて来て、どんどん生みだされた中からいろんな本が生き残ってきたということは事実なんですけれども、そしてたくさん作家が生れて、みんないろいろ考えながら本を作ってきたんだけど、そういうことはなんか曖昧な雰囲気と曖昧な感受性と、わあステキ！っていう言葉が代表するような、そういうイメージで絵本が長いこと見られてきたっていうのかな。私なんかは、わあステキとは思っていないんだけど(笑)、外に出ると、絵本作家ってすてきね、ってこういう言葉に苦笑いしながら長年やってきたなという気持ちがあるんだけど、そこをおさえていく何かが必要だとずっと考えてたのね。私が考えてきた子どもというのは、いったい何かっていうと、一つには文字を知らない、ということですよ。さっき言ったように、文字を知らない民族というのはたくさんいるけれど、今現代社会で文字を知らない人っていうのは、おとなではいみせんけれど、唯一まだ文字を知らない幼い、0歳1歳2歳3歳、あんまり早く文字を知り過ぎて、その時間が短くなってすごく残念なんですけれども、文字を知らないっていうことが、人間にとってまだ知らないということは何なんだろうということ随分考えました。文字を知ることによって考えというものを人間は相当エスカレーターさせて、複雑な社会を作り出して、複雑な学問を生じさせて、それを普遍化させて、というそういう経緯をずっと辿ってきたわけですけども、そこにまだ文字を知らない子どもたちが何年かを過ごしているわけですよ。その時代にあの人たちは一体なにをしているのかっていう、そういうことを私はあの子たちの絵の表現からびっくりするようなものを見たわけです。文字を知り出すということは、だんだん絵の中に自己が流れださない、人と比べたり、人と競争したり、考えたり悩んだりという、人間のある種不幸みたいなのが、もう文字を覚えると共にどうも脳の中にそういうもの生れ出てきていますね。なかなか表現というものが不自由になってしまうっていう感じを持っているわけです。まだ文字を知らないあの自由な柔軟な頭こそ子どもだっていうように、相当狭く子どもを限定していると思うんですけども、それが徐々に社会化されて17、8歳になるまでにいろんなことを学びながらおとなになっていくわけですけども、その子どもたちには本当に絵本を見るときにびっくりするような反応を示すわけですね。私は、子ども達が絵本を読む姿に自分自身子育ての中でびっくりしてまいりました。

子どもは絵が読めるんですね。絵にある情報をみんな取り込むことができる。文字が読めないから絵を読む。私が、いやいろんな絵描きがかいた絵を大人は情報として読み取りますよね、ところが子どもっていうのは描いた喜びとか描く時の気持ちとか、人間としての作者の全てを絵本の中から読み取ることができるというふうには私は思いました。何故かっていうと、誰が描いたということは知らなくても、子どもは誰の絵という識別が相当小さいうちからできるわけですね。「にしまきかやこさん」っていう画家が、全然違うスタイルで描いた本を

つけ合わせてこれは同じだということを示す子どもがいるのね。それからうちの子どもは、長さんの本が好きだったし、それから、加古さとしさんの本もすごく好きでした。子どもたちは絵が何を言っているのかということにいつも関心があったんですね。私はそういう子どもたちの感受性というのを、やっぱり人間の基本的な感受性だと思えます。それは決しておとなになって失われちゃうわけではなく、いろんなものが、余計じゃない、大事なものが次から次から入り込んでいくわけだから、感受性がしまわれてしまうという発揮できない場面というものをずっと経験してくるんだろうと思いますけれども、絵を読み取る力で、私たちが見落とすような細部まで丁寧に子どもは見えていくわけですから、絵本の間違いいというのを私どものすごく神経質に描くんですけども、発見するのは常に子どもなんです。例えばドアの外開きが内開きになった、これは間違いだと指摘されました。そういうことはしょっちゅうあると思うんですけども、そういうふうには、まず、見方が大人とは全然違う目で、そしてあらゆる作者の絵描きの描いたものを読み取っている、というか読み取る能力がある。全部の子がみんなそうやって読んでるかっていうと、子どももなかなか忙しくて(笑)あれですけど、能力としては持っているというふうに思うんですね。

それから、もう一つ、そのことから考えて、私たちは作者としておとなとして本の与え手として、情報を与えるのではない、もっと違うなにか豊かな表現というものを子どもの心に伝えるというような、そういうことが絵本を読むということなのね。それは読んであげるお母さんの豊かな心、いろんなものが混ざり合った中で、子どもはほんとおとなの何倍も絵本を楽しんでいるということを知る必要があると思えますね。

絵本を読む楽しみに、もう一つ子どもって同じ本を繰り返し繰り返し繰り返し読みます。好きな本は本当に好きで、毎日でも読む。私なんかもすごく嬉しいことに、『わたしのワンピース』を365日お姉ちゃんが毎日読み続けて、次に二番目のお子さんがまた365日毎日読んで、また三人目のお子さんも365日、毎年毎年毎日読まれたということを知ることがあるんですけども、ほんとにそのことはびっくりするようなことですね。私たちは毎日なんてとてもじゃない、どんなに好きな本でも、一年に一回、一生のうちに三回もあればいいや(笑)、っていうふうにはそういうおとなの感覚っていうのはできちゃって、同じものを毎日楽しむなんてとてもできないわけですよ。ところがそれを子どもはする。うちの子どもも毎日読んでもらいたいものが決まっていた。その他に私もプロですから、子どもにいろいろ試してみるんですけども、なかなか子どもは私の好きな本にとりついてくれないという経験を随分しました。だから私がいい絵だと思って子どもは別になっていう感じがあるわけです。逆に、私がこんな絵—それは 加古さとしさんのことですけど(笑)—なんかにもすごく飛びつく。これはなんだろうとずっと思っていました。加古さとしさんの本の中には、いいおとなが子どものことを思って、ほんとに心から子どもにメッセージというちょっと語弊があるんですけども、全体像、加古さとしさんというおじさんから手を差し伸べてくれるというような、そういうものがあの本の中に閉じ込められて、そのことを子どもは分かるんだというふうには私は考えざるを得なかったんですね。子どもはいい絵が分かる私とは思ってしまし

た。質のいい絵にはびっくりするような反応を示すわけですけども、そのいいということの原点というのは、じゃあ何なのかということを考えさせられる経験をしてきたんですね。子どもが繰り返し繰り返し本を読んでもらうってことはなんだろう。幼稚園の先生もお母さんもみんな考えると思うんですね。私は、あれが心の体操だと思おうとしています、思っているというか。子どもたちの心は繰り返し繰り返し楽しい経験、好きな経験、面白い経験、わくわくする経験をしたいわけですよ。面白いことに、面白いというか当たり前ですが、私たちは子どもを育てるときに、目に見えることはよく見るわけだから、背が伸びた、身体—肉体の背がどんどん大きくなることにすごく喜ぶわけですよ。そしてまた何センチ大きくなった、体重も増えた、ミルクもたくさん飲んだ、これもこれもこれも今日は食べたわ、ということをもすごく喜びとして親は子育てをします。それから今日はハイハイができたとかね、今日はお座りができたわ、とかそういう成長、何ができた、それから縄跳びができた。歩くようになった時なんかが一番面白いと思うんですけども、子どもが歩くときってほんとに面白くて、子どもってというのは、本能的に立って歩くようにできているらしいんで、そのために何度も何度も繰り返し転んでは起き転んでは起き、一歩歩いては転び二歩歩いては転び、それからだんだんだんだん毎日毎日毎日繰り返し繰り返すわけですよ。それがちっとも辛くない、すごい子どもの喜びですよ。子どもの姿見ていると、歩けたときの子どもの喜びはほんとにすばらしい、それを見ている親も本当に喜ぶわけですよ。はあ歩けた、もっと明日は速く歩きなさいとか赤ちゃんにむかって言いませんよね(笑)。親は小さい時に子どもがそういうことをできるようになったとき本当に喜んで育てると思うんですけども、ところが繰り返し繰り返し本を読んでくる子どもを、私はそれと同じように心の喜びを繰り返し繰り返しすることによって心が育っていくと思うんですけども、私たちが心が見えないし、私は心が育ったとか言いませんからね。何も言わない子どもの心が育ったことを私たちはどうしても見落としてしまう。毎日同じ本読むんじゃないで違う本を読みなさいと言いますよね。ところが、子どもは今楽しくて今嬉しくて、今心の動くことをやりたくてやりたくて仕方ないのに、おとなは全然違う外れた方向からもっとこっちの本を読みなさい、これは素晴らしいとか、字のたくさんあるのを読みなさい、というふうには要らぬことを山ほどして子どもの心を駄目にしていくというふうには私は思います。はっきり歩き出した子どもに明日はもっと速く歩きなさい、今日はこっちに行きなさい、明日はあっちに行きなさいとかそんなことは言わないにもかかわらず、心のことになると、今日は右に行きなさい、明日は左に行きなさいというふうには子どもの心をいじくりまわすというようなことを、ほとんどの親は、私も相当しましたけれど(笑)、やっているのではないかと思うんですね。

本当になんで子どもは絵本が好きか、ここにいらっしやる方はみんなそれが前提で考えていらっしやると思うんですけども、ご自分が好きだっていう方もたくさんいらっしやるし、子育てされていない方もいらっしやると思うんですけども、でも幼い子どもみんな、絵本が好き、それからテレビが好き、テレビゲームも好きというふうには、だんだん環境が子どもが好きなものも山ほど増えて来ているんで、そこでいろんな問題が起こるわけですけども、私は心は情報を収集するために存在しているわけではない！ っていうふうには思います。心の問

題は最後にお話したいと思うんですけども、情報じゃなくてもっと深いもの、もっと人間的なもの、もっと本当に必要なもの、条件反射というふうなものでもない。そういうわけで絵本というのは心にとってなんかどうも親子の中で子どもを育てていく上では重要な存在らしいということ、私も絵本を描きだしてから10年くらい経ってから、深く考えるようになりました。なんとなくやっぱりものを作る人間というのは、自分のことをどうしても考えてしまう。自分の表現とか、自分の本は子どもが好きかしらとかそういうことをいつも思うんですけども、もっと大きく絵本というジャンルが、おとなの個々という浅はかなものを越えてね、共有できる人間の文化的財産としてね、必要なんじゃないかと思えるようになりました。

そのためには私たちはいろんな工夫を、本を作る人間としてはね、もちろんはじめの表現の基本ということをいつも考えて、元氣よく子どもが絵を描いた姿のように、私も内側から描きたいのを描くということを、いつも心がけているわけですけども、毎年毎年絵本を描いてくださいと言われると、なかなかそういういろんな工夫を自分で凝らしていかなくちゃいけないし、新しいものを作りたいし、そういう中で毎年毎年一冊くらいはオリジナルなものを作りたいなとか思ったりするんですけど、その時に、子どもたちが本当に喜んでくれると思っているんですけども、相当空振りすることがあるんですよ。子どもたちがやっぱり食べるものが好きだから、食べるものがいっぱい出てくるものを作ろうかなとかいろいろ姑息な考えをすべし(笑)。そうすると全然だめだったり、売れなかったり使えなかったり、絵っていうものは絵描きですから、絵を描き込んでみたいと思うことがありますし、絵とは一体どういうことかということを考えて、『絵のすきなねこさん』というのを書きましたけれど、あれはおとなには相当受けました、賞なんかも貰いましたけれども、子どもには圧倒的に人気が出たというものではありませんね。私はそういうものを作りながら、私個人はあまり偉そうなこと言えないんですけども、自分の描いた本について少しお話ししようかなと思います。

やっぱり私の美術というものを皆さんよく御存知だと思うし、これはね、私自慢してるわけじゃないんですけどもね、全然大人に受けなかった本ですね。ところが子どもが好きになってくれてどんどん

どんどん広がってって、ほんとに多くの部数が世の中に広がっていったわけですね。それが私にとっては、非常に嬉しいことで、ただおとなと子どもの絵を見る力の違いというのがすごくあって、面白い話がいくつかあるので、ちょっとこの本(『わたしのワンピース』)の話を読みます。これ描いたのが1969年ですから、まだ私が描き出して3年目なんですけれども、私はいつも子どもの時から絵を描いていたものですから、なにしようといつも手が動くんですよ。スケッチブックなんかいろいろのものを描きながら、何か次に作らなきゃいけないなと思いつきながら手を動かしている中でやっぱり最初にできたのが、こういう絵です。そしてこれはいろんな物語になったらいいなと思っていくつも描いてたんですよ。それは、私のこども時代の遊びの中にもあったことで、私たちはリカちゃん人形のない時代でしたから、いつも自分で着せかえ人形を作って遊んでました。ここがいたい女の子の顔になって、そしてこういうふうにお洋服を作って、肩のところに糊付けていうのを作って、折って、いろんなお洋服を着せかえるという、そういう遊びを随分子どもの頃してましたから、子どもの本を描こうと思うと、なんとなくそういう時の絵が出てくるんですよ。こういう模様がたくさん、いろんな模様のワンピースがあったら可愛いな、っていうふうな、見るだけでも楽しいなっていうふうな思いましたのが、私がやっぱり自分で服を作らなきゃいけない時代だったので、うちの母は、洋裁で人のお洋服を作っている人だったものから、お洋服の見本とか、スタイルブック、今のファッション雑誌みたいなものや、いろんなブラウスとか、そういうものがたくさんあったんですよ。それを見てるととても楽しくてその時代よく見ていました。自分で服を作るときに、それを真似しながら、こういう服にしようか、ああいう服にしようかと、遊びと実用を兼ねていたんで、そういう癖があったんで、いろんな洋服の絵を描くなんていうのは私のこども時代の延長なんですよ。だから、この本はわりとあっさりさらさらっと、いろいろな模様のワンピースの本を作りたい、それにはその前にはちょっとお話がなくちゃいけない、ストーリーがなくちゃいけない、ということで、そのために前後左右を埋めていったわけですよ。そしてこれは最後に、空から白いキレが落ちてきたというようにして、ちょっと不思議なワンピースっていう雰囲気をつけたわけですよ。それで自分でお洋服を作って出かけるわけですけども、



西巻茅子氏の絵本が講演会場に並べられた

「できたできたラララ ラララ 私に似合うかしら」こうやって歩いていって、花畑をこういうふうを描いた。こういうことは、絵本の展開ということを一冊目で随分勉強しまして(笑)、ちょっと次のページに描きましょう(笑)とか思って描いたんですけども、そしてこの花畑を通して、あれワンピースが花模様になってこういう風になるわけですよ。そうするとね、ここがね、「リアリティがない！」って言われたんですよ、おとなの人にはね。なんで花畑を通ると花模様になるのか(爆笑)理解が子どもにはできない、って言われました、編集の段階で。それは私はね、なんでって思いました。私はやっぱり目の人間だからそうだと思うんですけども、目で見たものはそれが信じられるっていうか、そういうところがあって、ちょっとこんなにたくさん花が描いてあるんだから、次のページも花模様でいいじゃないの(笑)という説明を私はしたんですけど、それじゃあやっぱり駄目だと何度も言われました。雨がふると水玉模様がつくでしょ、そのことかしらって聞かれましたが、全然関係ありません(笑)。ここにこれだけ雨があるから、次のページは水玉模様でいいじゃないか、と説明したんですが。そのことは、人間の発想がだんだんおとなになっていくに従って、このことはどれがどうしてこうなってという三段論法ですね。でこうなるのよっていう、物語の筋道っていうのはみんなそうになっている、原因がなければここには至らないから、この間にもう一頁つけなさいとさんざん言われたんですけども、私は要らないって言ったんですけども、というふうには絵のリアリズムというのは、見たものは、真実として心の中に入るんですよ。なぞって情報としてというものを超えて、存在として心の中に入る。絵画は、ことばと同じように並立して存在するというふうには私は思うんですね。ことばで話すことはことばとしてことばの世界が私たちの内に宿る。絵の世界は、絵の世界全体をトータルとして、目から入って心に宿る。そういうものだと思うので、絵本というのはことばと絵とが両方が同じ力、まあ前後いろいろありますけど、何もことばを絵がなぞっているわけでは決していない。別の情報としてトータルとなって人の心に入ってくるというふうには考えたいと思っています。これはここまで若い頃難しく複雑に考えたわけではないんですね。私は絵画的な人間だったんだろうと思うんですね。描いてあるからいいじゃない、なんでわからないの、っていうそういう気持ちでした。それが、この本が出たとき、その事がわかってくれる人はほとんどいなかったと思うんですね。何の紹介もしてもらえなかったし、なんの誉め言葉ももらえなかったし(笑)、ただ出したということだったんですけども、5年経ち10年経ちしていくうちに、だんだんだんだん子どもたちが認めてくれるようになった。6、7年たった時かな、子ども図書館の方が、朝日新聞の「こどもがすきな本」というシリーズにこの本を紹介してくれたんですが、それがマスコミに登場した最初の私の本なんですよ。それが、「なんだかかわからないけどいつも図書館からなくなっちゃう本、子どもが常に持っていっちゃう」というふうにして紹介していただいたんですね。だから、わたしは絵画的表現というものを受け取る能力っていうのが、子どもには相当あるっていうふうにはやっぱり思っています。このことがすごくよく証明してくれてるんじゃないかと思ってるんですよ。

やっぱり子どもが絵本から得る情報は、絵画から得る情報が大きいんだということが、ほんとに社会の合意にならないと駄目だと思います。一人の人、二人の人だけが分かっているてもいけない。いい絵本とか、どれがいい絵本とか、そういうことを研究してらっしゃる人はた

くさんいると思うんだけど、それがお母さんたちの中に届かないと、どうしても母親というのは絵本の文字を読んでしまう。そして、絵は少女時代の感受性で見えてしまう。本当に絵を見て見て見続けてきた人は、絵を見る能力っていうのは高まってくると思うんですけども、最近編集者は絵が見れるようになったなあって30年経ってつくづく思います。30年前の編集者の多くは絵が見られなかった。綺麗な絵ですね、とか水彩で描いてあって暖かな線ですね、とか説明の仕方聞いただけで、ああ分かってないなと分かっちゃうんだよね(笑)。絵っていうのはもっと深くてもっと素晴らしい。つまらない絵はほんとにつままないということ子どもは分かっているのに、大人はなんだかきれいに描いてあったり、すごく現実を正確に写生しているものでもいい絵とつまらない絵があるということがなかなか区別つかない人が多かったですよ。ところが今、例えば花の図鑑の絵見たって、いい花の図鑑とつまらない図鑑があるのね、描く人間の貧しさっていうのが絵にあらわれちゃって、あれだけ技術が大変なものなんだけど、やっぱり豊かな、例えば植物学者の絵描きとしては素人の人が一生懸命正確に描こうとして描いた図鑑の方が素晴らしい図鑑があるんですね。心がそこに、人間としての存在がそこにあるかどうかということが絵画のなかにも問われてるということに気がつかない人すごく多くて、それは残念ですね。(文責：香曾我部秀幸)

シンポジウム

「世代を越える絵本—絵本のヤングアダルト現象—」

司会：佐々木宏子

シンポジスト：赤木かん子（児童文学研究者）

松井英夫（ほるぷ出版）

飯野和好（絵本作家）

『葉っぱのフレディ』（バスカーリア著／みらいなな訳／童話屋／1998）や、『いつでもあえる』（菊田まりこ著／学習研究社／1998）などの絵本は、10代後半から20代・30代のみならず、もっと広範囲の年齢層をも巻き込んだ「世代を越える絵本」として、一種の社会現象となった。絵本のヤングアダルト現象とは何か？3人のシンポジストに語っていただいた。

ヤングアダルト絵本について、もっとも先駆けて発言をしてきた赤木かん子氏は、おとなが面白いと思った絵本を子どもが面白いと思うわけではない。ヤングアダルト絵本というのはテーマが非常に現代的なものであり、おとな・子どもにかかわらず、そのテーマを自分の問題として抱える人に共通するものだという。その多くのテーマは、現代社会の中でおとなとして成熟しきれていない人々がもつ困難や課題を反映したものと言える。

長年絵本の編集者として活躍してきた松井英夫氏は、1980年代以降テーマ性とイラストレーションの強い絵本が数多く現れ始めたが、必ずしもバランスがよいとは言えない。社会の変化とともに人々の生き方に多様化が起こり、ヤングアダルト絵本の出現は、60年代の健康なものから比べると、苦しい時代の産物でもある。また、女性の読者が多い。

いまもっとも注目を集めている絵本「ねぎぼうずのあさたろう」（福音館書店）シリーズの作家飯野和好氏は、股旅装束でさっそうと登場された。ねぎぼうずのあさたろうが宿敵とたたかひながら繰り広げる旅の物語を、ユーモアたっぷりに浪曲で披露され、盛大な拍手が広い会場に鳴り響いた。

（佐々木宏子）

研究発表プログラム

A室

9:00～9:20

- ・近代日本の0・1・2歳児の絵本の変遷
村川京子（大阪薫英女子短期大学）

9:20～9:40

- ・戦後の小学校低学年児童は、どのような絵本を読みついできたのか
米谷茂則（浦安市立富岡小学校）

9:40～10:00

- ・戦後初期の絵本
鳥越信（聖和大学）

（休憩・移動）

10:10～10:30

- ・『こどものせかい』について
柴村紀代（藤女子大学）

10:30～10:50

- ・金井信生堂刊行絵本『コドモノチカヒ』に見る「陰影」の表現
大橋真由美

B室

9:00～9:20

- ・〈いたずらはかせのかぐの本〉における「言葉と絵」
瀧川光治（聖和大学）

—子ども自身が考えるきっかけとしての「言葉と絵」のつながりの分析—

9:20～9:40

- ・桃太郎絵本の視覚表現の変遷
窪田美鈴（神戸大学大学院）

～江戸期から明治期における門突破図を中心に～

9:40～10:00

- ・「食」から見た絵本考
鈴木穂波（梅花女子大学絵本研究会）

（休憩・移動）

10:10～10:30

- ・表現としての見返し
中川素子（文教大学）

10:30～11:00

- ・英国古典絵本の研究
—ランドルフ・コールデコットとケイト・グリーナウェイの魅力—
藤本朝巳（フェリス女学院大学）
雨宮明子（フェリス女学院大学大学院生）
富田景子（フェリス女学院大学大学院生）

作品発表（展示）

11:15～12:00

・『うちのポチ』『ハナちゃん』

春日和香子（明治図書出版・絵本作家クラブ）

・『窓の向こうで』

すずきふみえ

・『つきがぼうぼうもえていたころ』『ひも』

小林由佳子（武蔵野美術大学研究室勤務）



「ハナちゃん」を手にする春日和香子さん



「窓のむこうで」を手にするすずきふみえさん



「つきがぼうぼうもえていたころ」と「ひも」を手にする小林由佳子さん

Victor Watson 氏講演

「イギリス人研究者と絵本研究」要旨

まず、導入として、絵本を含む子どもの本の特徴にふれたうえで、現在イギリスで試みられているさまざまな絵本研究のアプローチを代表的な研究者の批評から紹介、さらに、自ら実践してきた「対話的」アプローチについて、子ども読者による具体的な作品の読みとりの例を示して講じた。最後に、話のしめくりとして現代を代表する3冊の絵本（モーリス・センダック『かいじゅうたちのいるところ』、アンソニー・ブラウン『トンネル』、ジョン・バーニンガム『おじいちゃん』）をスライドで見た。

1. 導入 子どもの本は、書き手と読み手の立場に違いがある点が特徴的である。書き手であるおとなは、自分たちがすでに別れをつげた過去の「子ども時代」に関心を寄せているのに対し、読み手である子どもは、自分たちの未来の「成長」に関心を寄せている。こうした特徴から、子どもの本を研究するのに2種類のアプローチが生じる。読み手の側に力点をおいた「教育的観点」を重視したものと、（読者は無視して）文学作品としてテキストの解釈に力点をおいた「文学的観点」をとるものとなる。この問題は、とくに絵本では、幼児用の本という枠の中で絵（イラスト）を観るべきか、芸術作品として観るべきか、といった論議をもたらすこととなる。しかし、望ましい形は、どちらかにかたよるのではなく、両者を融合させた総括的なアプローチであろう。なによりも絵本というのは、「芸術作品」であると同時に、こどもとおとななどちらにも同じように大切なものを共有する「コミュニケーションの場」であることを忘れずに論じるべきである。

2. 研究方法 代表的なものは、歴史的アプローチと批評家的アプローチであるが、いずれにしてもまだ新しい研究領域である。現代の絵本批評でもっとも関心をもって論じられるのは、絵本のメタフィクション性(metafictive)、テキストとイラストの語る物語がずれて共存しうること(narrative perspective)、ポストモダニズム性(postmodernism)の3点である。

歴史的アプローチの代表は、ブライアン・オルダソンである。その非常に豊富な知識に基づいた詳細な研究は高く評価されている。著作に『六ペンスの歌をうたおう』などがある。

これに対し、デイヴィッド・ルイスらは、そうした伝統的な歴史的アプローチへの批判から出発した。これまでのように、絵本を単に「絵を集めた本」と見なすのではなく、絵と文の相互作用からなる絵本ならではの多様で複合的な特質を捉える、新しい視点・アプローチが必要であることを主張した。（訳者注：ルイスは、この分野ではじめて博士号を取得した。それをまとめた著書 Reading Contemporary Picture Books が今年出た。）また、ジェーン・ドゥーナンは、絵本について分析し論じる言葉と方法をはじめて提供した先駆的研究者として尊敬される存在である。著書 Looking at Pictures In Picturebooks の中で、具体的な作品を用いていわば分析の手本を提供しながら、さまざまな要素が全体として絵本の内容とどのように結びついているのか捉える手がかりを示した。もうひとり注目を集めている研究者に、ウィリアム・モウピアスがいる。彼は、「視覚的デ

ザインのコード (graphic code)」という、絵の文法を自ら考え、それを用いた絵本の分析法を提唱している。

3. 「対話的」アプローチ 上記のような研究方法とは別に、イギリスの教育現場でよく行なわれてきたものに、「リアル・ブックス」を用いた「対話的」アプローチがある。これについて、自ら数年にわたっておこなってきた実践例を紹介した。

数年前まで、イギリスの学校教育現場では、「リアル・ブックス」といわれる、(編纂されたテキストではなく) 現物の本それぞれを用いる教育法が中心であった。(そうした背景があつてこそ、アンソニー・ブラウンのような優れた絵本作家が生まれ得たともいえるのに、現行の指導要領はそれを無視したものになっているのは、非常に遺憾である。) 講演者自身、数年にわたって、幼稚園の教室に絵本を持ち込み、絵本本来の読者である幼児と対話しながら絵本を読むことで、彼らが絵本から学び取る過程や絵本について語る様子を観察してきた。その結果わかったことが主に3つある。まず、幼児たちが、「名づけ」から「解釈」に進むプロセスを経るということ、次に、1つの単語さえ解釈できない(したがってそれを言語的に説明することもできない) 段階にいる、読者として初心者である幼児でも、実は、奥深く洗練された文学的概念を理解できるということ、さらに、幼児たちは、そうした概念を理解したうえで、必ずしも明確に示されていないような絵本全体のテーマとも的確に関連づけることができる、ということである。この発見は、絵本研究のあり方そのものにとっても非常に示唆に富むものであった。

4. まとめ 絵本は、絵と文がさまざまな形で相互に作用し「共存」する独特の表現形態である。したがってそれを研究し論じるのにも、全体的で融会的なアプローチが不可欠なのである。なかでも、とりわけ、洗練されたおとなの見方と経験の浅い子どもの見方という両方の視点をとりいれ、子どもと共に絵本を楽しむ「共同作業」から見えてくるものにこそ、今後の豊かな可能性が見出せるのではないだろうか。

(田中美保子)

講演者ヴィクター・ワトソン氏について

元ケンブリッジ大学ホマトンカレッジ英語英文学科主任教授。専門は、18C および 20C の英文学・英米児童文学・絵本研究。

1974年から同カレッジにて、英文学、英米児童文学、初等・中等国語科教育法を講じる。とくに、イギリスでいち早く児童文学研究コースを設置した同カレッジにて、その理論・実践の中心をになってきた。'88年より隔年で「子どもと文学」をテーマにした国際学会を同カレッジで主催、各回ごとの報告書を一般読者にも読める形にまとめる(下記編著書参照)など、今日のイギリスにおける児童文学研究の礎を築いてきたパイオニアのひとりである。'97年に早期退職し、『ケンブリッジ版児童文学事典』(Cambridge Guide to Children's Books in English、ケンブリッジ大学出版局より今年9月刊行予定)の編集に専念。同書は、類書ハンフリー・カーペンター編のオクスフォード版(邦題『世界児童文学百科』)以来、17年ぶりにイギリスで出る本格的児童文学事典として、内外から大きな期待が寄せられている。

そのほかの編著書に、『アリス以後——児童文学の探索』(1992年)、『絵を語る——絵本の絵と幼い読み手』(1996年)、『子ども部屋のドアを開けて——1600年~1900年の読むこと・書くこと・子ども時代』(1997年)、『テキストと子どもが出会う場』(2000年)、『シリーズ物の児童文学を読む』(2000年)などが多数ある。



講演中のヴィクター・ワトソン氏

ラウンド・テーブル

●ラウンド・テーブル1 絵本作家研究：赤羽末吉の報告

コーディネーター：藤本 朝巳（フェリス女学院大学）
話題提供者：赤羽 研三（赤羽 末吉 三男）
：上島 史子（安曇野ちひろ美術館）

今年度このテーブルでは、絵本作家研究として、1980年度の国際アンデルセン受賞者（画家賞）、赤羽末吉を取り上げました。当日は50名を超える参加者があり、盛況のうちに会を行うことができました。

今回は話題提供者として、赤羽末吉のご子息（三男）であり、フランス詩の研究者である赤羽研三氏、及び赤羽末吉の全作品の原画、ダミー、スケッチ等の資料を保管している長野県、安曇野ちひろ美術館学芸員の上島史子さんをお迎えし、楽しい会を催すことができました。

話題を提供して下さるお二人には、コーディネータの、藤本朝巳（運営委員）より、あらかじめ、会の進め方、時間配分をお願いし、また提供していただきたい話題を依頼してありましたので、会を順調に進めることができました。

赤羽末吉の略歴や業績（作品及び受賞一覧）については、司会者より配付資料が配られていましたが、赤羽研三さんからは、一人の息子から見ての赤羽末吉の人生や姿（どのような人間であったか）を、また父親（赤羽末吉）や母親から聞いた話を、研三さん自身の思い出などを織り交ぜながらお話していただきました。特に、絵本画家になる前後の頃の赤羽末吉、家庭での頃の赤羽末吉についてあまり知られていないことを、息子から見た印象深い思い出として語っていただき、参加者一同、印象深く拝聴いたしました。さらに、羽末吉の性格と、赤羽末吉の作品との関係についても簡単についても触れいただきました。中でも、研三さん自身が自宅に残された原画、デッサン、下書き等の全資料の整理を行った経験から、伝記的な面でも作家の様子を補足していただきました。さらに、アンデルセン賞受賞時の赤羽末吉の人柄を偲ばせるエピソードなども聞かせていただきました（研三さんには、司会者からお願いして、再販された新作の紹介もお願いしました）。

上島史子さんには、資料を用いながらの、赤羽末吉についての話をお願いしてありましたが、まずは1998年、ご遺族より、ちひろ美術館へ赤羽末吉の資料（約6000点に及ぶ赤羽末吉の全遺作）が寄贈され、所蔵するに至った経緯を紹介していただきました。

上島さんは、寄贈された作品に、様々な画材と技法を用いて描かれた絵本原画の他、制作過程で作られたダミー、スケッチなどが含まれていたことを紹介し、美術館員として、そのダミーからは、赤羽末吉の絵本づくりへの周到な姿勢を読み取ることができると語って下さいました。今回は所蔵作品のなかから『スーホの白い馬』『ほしになつたりゅうのきば』などの絵本制作過程の資料も交えて具体的に紹介し、赤羽末吉の絵本の魅力について語っていただきました。上島さんは、「ちひろ美術館の役割は、人類の貴重な文化遺産であるこれらの作品を、正しく保存し未来へ伝えること、そして今後の絵本文化のために活用していくことにあると考えている」と、美術館員としての姿勢も

きちんと語って下さいました。

今回は、一人の特異な画家・作家である赤羽末吉の背景と彼の作品の背景を、二つの異なる視点から紹介し、一人の芸術家の姿を違った面から知ることができ、たいへん興味深いラウンド・テーブルとすることができました。途中で、またお二人の話の後にも、出席者からの質疑応答も活発で、主催者、参加者ともに楽しい会にすることができました。ここに報告をするとともに、話題提供者のお二人と、参加者のみなさまにも厚くお礼申し上げます。（藤本 朝巳）



ラウンド・テーブル1 絵本作家研究：赤羽末吉の報告

●ラウンド・テーブル2 絵本表現研究：“もの”としての絵本

コーディネーター：今井 良朗（武蔵野美術大学）
話題提供者：杉浦 範茂（グラフィックデザイナー）
：松本 猛（安曇野ちひろ美術館）

一般的に絵本は、色彩豊かな原画があって、それを写真に撮って整版し印刷されたものを想像するのが普通です。しかし、実際には印刷による表現も多様で、決してカラーで複製、再現されたものだけではありません。また、絵本という見開きの平面的な画面の中だけで見ていく傾向がありますが、絵本は、そこに描かれた物語やイメージを、本という形態を媒介にして読者に伝えてくれるメディアである一方、固有の大きさと厚みを持った6面からなる立体物です。絵本を立体的な“もの”としてとらえると、表現の表れやかかわり方も異なった視点で見ることが出来ます。

絵本では、ページを繰ることが時間と空間を変化させていくのに重要な役割を果たしていることはいうまでもありませんが、読み手は、ページを繰る行為、身体とのかかわりにおいて感覚的にとらえ、無意識のうちに奥深い内容にまでかかわっています。

人と本との直接的な接触を意図的に作り出す、そのような工夫、仕掛けも絵本制作の上では重要な要素になっています。

このRTでは、平面的な絵画の連続的な構成とはまた違った、1冊の本全体を物質的な“もの”としてとらえ、単純に見るといふ関係を超えて、より身体的な関わりを意識的に語り合ってみました。

杉浦範茂さんは、50年代、岩波写真文庫のデザインの仕事にかかわったことが、現在の本づくりの原点になっていることを、名取洋之助の仕事にも触れながらも紹介されました。強調されたのは、「誰のために何を通じて何を語るか」、受容する側への視点は何よりも重要で、作り手が用紙や文字の大きさ、行間など真剣に考え、読者の分を背負い込まなければ、良いものはつくれない。作る側が疲れなければ、その分読者が疲れる。心地よい本とはそういうもの、と訴えかけました。

松本猛さんは、本を楽器に例え、音を出したり、情報を伝える価値だけでなく、「もの」としての美しさ、そこにはたらく美意識こそ大切で、それは心で読む部分、身体性をともなうものであるとまず切り出し、『きりのなかのサーカス』や『あおくとときいろちゃん』など、デザイナーによる絵本を紹介しながら、絵本は、作家と読者を媒介するものであり、物語を作りだすのは共同作業により、そこには対話が生まれる。絵本づくりとは、そうした状況をしかけていく作業であると語られました。

作者が、伝えたいことをどのような形にしてどのように伝えるかを考える時、自ずと身体性を伴っています。同様に、受け手の側も、何をどのようにどのような形で受け止めるのか、当然視知覚だけによるものではないはず。身体全体で受け止めるはず。絵本は内容やメッセージを伝えるメディアであるとともに、立体的で、構造的な、極めて物質的なものです。そう考えると、絵本は、もっと知覚の意味、対話的なコミュニケーションについて考えられても良いはず。限られた時間の中で、十分語りあえたとは言えませんが、絵本をこれまでとはまた違った視点で見ることができたという点で、意味があったのではないのでしょうか。(今井良朗)



ラウンド・テーブル2 “もの”としての絵本

●ラウンド・テーブル3 赤ちゃん絵本

日本版ブックスタートを事例として

コーディネータ：生田美秋（世田谷文学館）

話題提供者：佐藤いずみ（子ども読書推進会議）

：佐々木宏子（鳴門教育大学）

赤ちゃんの定期健診時に絵本をプレゼントし、本に親しむきっかけをつくる運動、ブックスタートが実施され、話題となっている。

始めに、この運動の推進者佐藤氏から概要を説明していただいた。ブックスタートは、乳幼児健診に参加した赤ちゃんと保護者に、絵本の入ったパックを、ブックスタートのメッセージとともに手渡す運動で、イギリス・バーミンガム市で始まった。日本では平成12年に杉並区でパイロットスタディが、平成13年より北海道恵庭市など20市町村で実施されている。

この運動は、〇イ本を通して赤ちゃん周りの人々（お母さんだけでなく）が楽しい時間を分かち合う。〇口ただ単に絵本のプレゼント運動ではなく、保護者一人一人に丁寧にブックスタートのメッセージを伝えて絵本を手渡す。〇八全国統一の、画一的なパターンの押し付けではなく、地域の特色や独自性を出していく運動であることが強調された。

これに対し、絵本研究の立場から佐々木氏は、〇イギリスでは欧米諸国に比べ識字率、学力の低下が大きな社会問題となっており、早期教育の実施が急務であった。そんな背景から短期間に自治体の9割が導入するまでになったが、イギリスと日本ではこの点は全く事情が異なる。〇口赤ちゃん絵本の問題は本質的に個人（親や家族）、地域の図書館、ボランティアが担うべきで自治体の介入は、早期教育化や運動の画一化の危険をはらんでいる。〇八既にある文庫活動という日本独自のすばらしい草の根運動との連携が十分検討されていない。その他推進母体の独立性や中立性、追跡調査など解決すべき課題は多いが、この運動を通して赤ちゃんにとって絵本の果たす役割の重要性が認識され、子育て支援の気運が盛り上がり、大きな意味を持つ運動になると期待を述べた。

日本は現在、核家族化、少子化、父性と母性の希薄化、大人の活字離れと、子どもを取り巻く環境は悪化の一路をたどっている。赤ちゃん絵本のよりよい関係を個人の努力のみに委ねることは困難である。全ての子どもに豊かな本との出会いの機会を保障しようとするこの運動の定義は大きい。(生田美秋)



ラウンド・テーブル3 絵本読者研究：赤ちゃん絵本 日本版ブックスタートを事例として

●安曇野ちひろ美術館

<ちひろ・生命をみつめて>

2001.7 / 20 ~ 9 / 25

いわさきちひろは、あかちゃんや子どもを、生涯のテーマとして描き続けました。青春時代を戦争の中で過ごした彼女は、生命力あふれる子どもという存在を愛情深く見守る一方で、戦争という大きな力によって、彼らが傷つき、幼く尊い命が失われることに対し、強い怒りを禁じえませんでした。本展では、ちひろが描いたあかちゃんや子どもたちの作品とともに、ちひろが平和を願って製作した3冊の絵本『わたしがちいさかったときに』『母さんはおるす』『戦火のなかの子どもたち』、今年オリジナル版が復刻された『青い鳥』の原画をご紹介します。

*同時開催

<ユゼフ・ヴィルコン展>

2001.7 / 20 ~ 9 / 25

*上記以外に、「ちひろの人生」・「世界の絵本画家」・「絵本の歴史」などの展示室もございます。

会期毎に作品入れ替えを行っています。

開館期間：3月1日～11月30日

開館時間：午前9時～午後5時（GW・8月は午後6時まで）

休館日：水曜日（祝日は開館、翌日休館）／GW・8月は無休
冬期休館 12月1日～2月末日／展示替えのための臨時休館あり

* 2001年

臨時休館日：5月10日、7月19日、9月27日

入館料：大人800円／中・高校生500円／小学生300円

団体（20名以上）、障害者手帳をお持ちの方とその介添えの方、65歳以上の方は100円引

〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原

TEL 0261-62-0772 テレホンガイド 0261-62-0777

FAX 0261-62-0774

<http://shinshu.online.co.jp/museum/chihiro/top.htm>

●軽井沢絵本の森美術館

夏の企画展「くらべる絵本展ー日本と欧米絵本の出会いー」

第2展示館にて。

会期：2001年6月29日（金）～10月8日（月）

くらべることは、こころの目を開くひとつの方法かもしれません。

今まで気づけなかったことに目を凝らす手段かもしれません。

私たちの国日本と欧米諸国の絵本をくらべてみましょう。あんなにも大きな海を隔てているのに共通点があったり、また一方で同じ主題が描かれていても全く異なる雰囲気や漂っていたり、文化の違いが見え隠れしていたり、と新しい発見がいっぱいです。二

つの地域の絵本を見て、読んで、感じた後に、皆さんの心の泉に「くらべた記憶」の雫が一滴でもしみ込みましたら、それ以上に嬉しいことはないと思います。

■主人公でくらべてみよう

動物 / 子ども / 作者によって生み出された独自の主人公

■話の内容でくらべてみよう

伝承物語絵本 / ナンセンス絵本 / ファンタジー絵本 / 生活体験絵本 / 異文化体験絵本

★併設展

「生きとし生けるものへの歌ー絵本作家 木葉井悦子の軌跡

第1展示館にて

会期：同上

花や草、風や動物など人間を含めてこの世に生きる様々なものたちを生き生きと描いた木葉井悦子。そのみずみずしい作品をご紹介します。

開館時間：3月～6月・10月～11月 9：30am～5：00pm

7月～9月 9：30am～5：30pm

入館料：

大人700円・中高生・500円・小学生400円

エルツおもちゃ博物館入館料：

大人400円・中高生・300円・小学生200円

2館共通割引セット券：

大人1000円・中高生・700円・小学生500円

お問い合わせ：

インフォメーション ehon@museen.org まで

Phone.0267(48)3340 Fax.0267(48)2006

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1

<http://www.museen.org/ehon/index.html>

◆交通のご案内◆

お車で

関東方面

練馬IC -<関越道> - 藤岡JCT -<上信越道> - 碓氷軽井沢IC -<約15分> - ムーゼの森

関西・中京・北陸方面

吹田IC -<名神道> - 名古屋・小牧JCT -<中央道> - 岡谷JCT -<長野道> - 更埴JCT -<上信越道> - 小諸IC - ムーゼの森

電車で

関東方面

東京駅 -<長野新幹線> - 軽井沢駅 -<タクシー8分> - ムーゼの森

関西・中京・北陸方面

新大阪駅 -<東海道新幹線> - 名古屋駅 -<中央本線・特急> - 長野駅 -<長野新幹線> - 軽井沢駅 -<タクシー8分> - ムーゼの森

●世田谷文学館

<村上康成 絵本の世界展>

2001.7/7~9/9

ボローニャ国際児童図書展、プラチスラバ世界絵本原画展などで受賞を重ね、現在最も注目を集める絵本作家、村上康成。原画でたどる絵本の世界へ、ご家族でどうぞ。19作品の原画、約200点が展示されます。

【原画展示作品】 展示作品は一部変更になる場合があります。

「ヤマメのピンクシリーズ」より

「ピンクのいる山」

「ピンク！パール！」(1991年BIB世界絵本原画展金牌賞受賞)

「ピンク、ぺっこん」

「ピンクとスノーじいさん」(1986年ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞)

アウトドア・ライフの絵本より

「さかなつりにいこう！」「星空キャンプ」

「ようこそ森へ」(1989年ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞)「イルカの風」

初期の傑作絵本より

「かいじゅうのうろこ」文・長谷川集平「おんぼろヨット」

文・長谷川集平「プレゼント」文・長谷川集平 (1988年ボローニャ国際児童図書展グラフィック賞受賞)

「ピーマン村の絵本たちシリーズ」より「おぼけなんてこわくない」

文・中川ひろたか「さつまのおいも」文・中川ひろたか

「おぼけなんてこわくない」「ことばあそびブックシリーズ」より

「ミルクくるみ」文・中川ひろたか

その他の物語絵本

「999ひきのきょうだい」文・木村研「コバンザメのぼうけん」

文・灰谷健次郎「めだかさんたろう」文・椎名誠

「ふゆのあさ」「なつはうみ」文・内田麟太郎

*文の表記のないものは村上康成文です。

主催：世田谷文学館

協力：村上康成絵本美術館、講談社、偕成社、童心社、徳間書店、BL出版、PHP研究所、ひかりのくに、チャイルド本社、理論社

後援：絵本学会、世田谷区教育委員会

観覧料：一般300円(240円) 高校・大学製200円(160円)

小・中学生100円(80円)

65歳以上・障害者の方150円(120円)

* () ないは20名以上の団体料金

会場：世田谷文学館企画展示室

〒157-1162 東京都世田谷区南烏山1-10-10

tel: 03-5374-9111 fax: 03-5374-9120

<http://www.setabun.or.jp>

<次回企画展の御案内>

没後30年 志賀直哉 展

10/6(土)~11/11(日) 38日間



村上康成 絵本の世界展 リーフレット
世田谷文学館

●国際児童文学館

<国際グリム賞>

2001.9 / 1 ~ 9 / 29

児童文学研究の国際的振興に寄与した研究者に贈られる「国際グリム賞」についての解説と、今回（第8回の）受賞者ジャン・ペロ博士（フランス）の著作と研究の関連文献を御紹介します。

*国際講演会

第8回国際グリム賞授賞式・受賞記念講演会

講演者 ジャン・ペロ博士 (Dr. Jean Perrot 国際シャルル・ペロ研究所所長)

演題 『蝶の羽の重さー図像にこめられたメッセージ』

通訳 畑中圭一氏(名古屋明德短期大学名誉教授)

とき 2001年9月29日(土) 14:00~16:30

ところ 大阪府立国際児童文学館 講堂

ジャン・ペロ博士 Dr. Jean Perrot :

1937年フランスに生まれる。ソルボンヌ大学比較文学科で博士号を取得する。博士論文は「ヘンリ・ジェームスとデカダンス神話」。パリ13大学比較文学教授を経て、国際シャルル・ペロ研究所所長を歴任。児童文学の比較文学的研究と絵本やイラストレーションの図像学的研究に力を注ぐ。また国際的な児童文学研究の振興に尽くす。

主な著書：『遊び・子ども・本』(1987)、『パロック芸術・児童芸術』(1991)、『子どもの本の遊びと賭け』(1999)、『イラストレーターたちの手帖』(2000)など多数。

問い合わせは 大阪国際児童文学館 TEL : 06-6876-8800

定員 : 150名 (先着順) 参加費 : 無料

申し込み方法 : 電話、メール、または当館カウンターにて

<こども室行事>

9月8日 15時~15時30分

「台湾のおはなし」当日参加自由 参加費 : 無料

9月16日 14時~14時30分

「朗読ボランティアおはなし会」当日参加自由 参加費 : 無料

9月23日 14時~15時

ワークショップ 「おはなしであそぼう」

対象 : 6歳以上 当日参加自由 参加費 : 無料

<募集>

物語体験クラブ

9月・10月11月各月の、第2・第4土曜日(全6回)

10時30分~12時

小学2,3年生で6回とも参加できる人、15名

参加費 : 500円

申し込み方法 : 往復ハガキに住所、氏名、学年、電話番号を明記のうえ、当館D係まで

ボランティア養成連続講座(全5回)「子どもと本をよむ」

9月25日、10月2日、10月9日、10月16日、10月23日

10時~12時

参加費 : 無料 対象 : 大人 定員 : 30名

申し込み方法 : 往復ハガキに住所、氏名、学年、電話番号、受講の動機を明記のうえ、当館K係まで

開館時間 : 9 : 30am ~ 5 : 00pm

休館日 : 水曜日、30日(9月)

お問い合わせ : 06-6876-8800 Fax.06-6876-8686

児童文学なんでも相談コーナー 06-6876-7479

〒565 吹田市千里万博公園 10-6 大阪府立国際児童文学館内

<http://www.iiclo.or.jp/>

E-mail : info@iiclo.or.jp

●ふくやま美術館

<アンデルセン童話絵本原画展>

2001.8 / 11 ~ 9 / 16

開館時間 : 午前9時30分~午後5時

休館日 : 月曜日

主催 : 財団法人ふくやま芸術文化振興会 ふくやま美術館 / 福山市教育委員会

後援 : デンマーク大使館 / 日本国際児童図書評議会 / 日本児童出版美術家連盟 / 日本児童図書出版協会 / 絵本学会

協力 : オーデンセ市立アンデルセン博物館 / オーデンセ大学アンデルセンセンター / ちひろ美術館 / 財団法人 児童育成協会 こどもの城
総合監修 : 松居直 企画協力 : メディアリンクス・ジャパン

住所 : 福山市西町2丁目4番3号

電話 : 0849-32-2345

JR 福山駅北口から西へ400m

事務局からのお知らせ

絵本学会研究紀要『絵本学』第4号論文公募再度のお知らせ

絵本学会研究紀要『絵本学』第4号の論文を公募します。下記の要領でふるってご投稿ください。

『絵本学』投稿の要領

- 1) 投稿資格 : 絵本学会会員および準会員
- 2) 内容 : 絵本に関する研究論文、報告、論説、研究ノートで、未発表のもの。
- 3) 掲載の採択 : 査読に基づき、編集委員会が掲載の採否を決定する。必要に応じて編集委員会の外に査読委員を依頼する場合がある。採否判定の過程・理由は開示しない。ただし、投稿者は、結果について説明を求めることができる。この場合、編集委員会は申し出内容を精査の上、適正範囲内で回答する。
- 4) 刊行までの日程 :
(1) 投稿締め切りは9月30日(必着)とする。

- (2) 掲載の採否は12月15日までに投稿者に通知する。
 (3) 刊行は当年度内とする。
 5) 原稿送り先：
 絵本学会事務局（郵送とする。Faxによる送付は不可）

『絵本学』執筆の要領

- 1) 執筆は、別に定められた「執筆要領」に準拠すること。「執筆要領」は、個別に事務局に請求する。
- 2) 使用言語：日本語とする。
- 3) 原稿の分量：原則として一篇につき、研究論文は8000字から16000字まで、報告・論説・研究ノートは8000字以内。
- 4) 原稿の体裁：必ず完成原稿であること。原則としてワープロによる横書きとする。
 表紙に原稿の種類（研究論文、報告、論説、研究ノート、）、題目（和文、英文）、執筆者名（ローマ字を併記）、所属機関、専門分野を明記する。
- 5) 提出物：
 - (1) プリント原稿3部（図版も含む。コピー可）
 - (2) 原稿を入力したフロッピーディスク（データは、原則としてWindowsまたはMacintoshのテキストファイルとする）
 - (3) 図版原稿（使用する場合はデジタル化せず、写真等を提出）
- 6) 図版の扱い：モノクロを原則とする。
 カラー図版の場合、経費は投稿者の自己負担とする。
 編集・印刷の都合で、図版は各論の末尾部に配置する。本文中への挿入はできない。使用する図版の数は特に限定しないが、本誌4頁以内に納められるものであること。
- 7) 校正：著者校正は1回。文字変換ミスの修正など最低限の訂正のみとする。
- 8) 抜刷等：執筆者には、抜刷30部と、掲載誌5部を無料進呈する。

●第5回絵本学会大会（2002年度）開催のご案内

第5回絵本学会大会は、2002年6月15日(土)・16日(日)の2日間神戸ファッション美術館（兵庫県神戸市）で開催することが決まりました。大会プログラムなど詳細は、次号のニュースでお知らせいたします。

●機関誌『ブックエンド』の販売について

5月に機関誌『ブックエンド』がプレ創刊号として刊行されました。会員の方々にはすでにお届けいたしました。機関誌を継続的に刊行するためにも、ぜひ周辺の方達、学生にご推薦ください。書店でも販売されていますが、ない場合には、最寄りの書店で取り寄せていただくか、直接フィルムアート社にお問い合わせください。
 なお、5部以上でしたら絵本学会事務局にFAXでお申し込みいただければ、10%引きで販売いたします。

・フィルムアート社
 〒160-0008 東京都新宿区三栄町10 日鉄四谷コーポ
 TEL：03-3357-0283 FAX：03-3357-0679

・絵本学会事務局
 FAX：042-342-5173

●大阪国際児童文学館の存続について

大阪国際児童文学館は、児童書・絵本・児童文学研究資料等が充実し、海外からも研究者が訪れるなど多くの人たちに利用されています。ところが、大阪府は財政難を理由に、大阪国際児童文学館を廃館も視野に入れ検討しています。

絵本学会では、大阪国際児童文学館の存続のために三宅興子会長が中心になって、大阪府に対して働きかけています。存続のための輪を広げるために、大阪府知事あてにぜひ提言メールを送ってください。ご協力をよろしくお願いいたします。

http://www.pref.osaka.jp/j_message/teigen/tijjfmt.html

●理事会・運営委員会

4月21日 運営委員会 於：日本女子大学会議室議題

- ・第4回絵本学会大会の進行について
- ・平成13年度総会の議題について
- ・規約の一部改正について
- ・機関誌刊行予算と会員負担について
- ・平成12年度会計報告
- ・平成13年度予算について
- ・研究紀要について
- ・その他

5月4日 理事会 於：フェリス女学院大学会議室議題

- ・平成12年度会計報告
- ・平成13年度予算について
- ・平成13年度の活動について
- ・第4回絵本学会大会のプログラム、進行について
- ・平成13年度総会について
- ・その他

7月29日 運営委員会 於：日本女子大学会議室議題

- ・第4回絵本学会大会報告
- ・第4回絵本学会大会の反省
- ・来年度絵本学会大会について
- ・大阪国際児童文学館の存続について
- ・機関誌『ブックエンド』の販売について
- ・絵本フォーラムについて
- ・その他